上海で紙芝居を！

二〇一一年一月、上海で初めての紙芝居講座が、カリン・レビナス・サブローさんの熱い思いで、実現しました。カリンさんは、上海のアリアンス・フランセーズの図書館司書として、仲間と手をつなぎ、上海中のインターナショナル・スクール司書が集まる総会で、講座を開いたのです。

この総会と四つのインターナショナル・スクールでの紙芝居実演と講座のために、私と日下部茂子さん(童心社編集者・紙芝居文化の会企画広報委員)が、上海へと出発しました。

そこで出会ったのは、世界中のさまざまな国で生まれた子どもたち、その未来を幸せにしたいと願う大人たち。

私たちは、紙芝居ならではの世界を生みだす、『おおきくおおきくなあれ』をすべての場で、まず演じました。この作品は観客が「おおきくおおきくおおきくなあれ！」と声をだして参加することによって、「成長したい」という人間普遍の願いを、共感の中で大きくしていきます。上海では、英語、仏語、中国語、日本語で、みなが「おおきくなあれ！」というたび、あふれるような喜びが、観客すべてに広がり、母国が違う人びとの心が深くつながっていったのです。

演じた後の熱気の中で、私たちは「紙芝居ならではの特性」を語りました。絵本とどこが違うのだろうかと、司書の方々は身をのりだします。

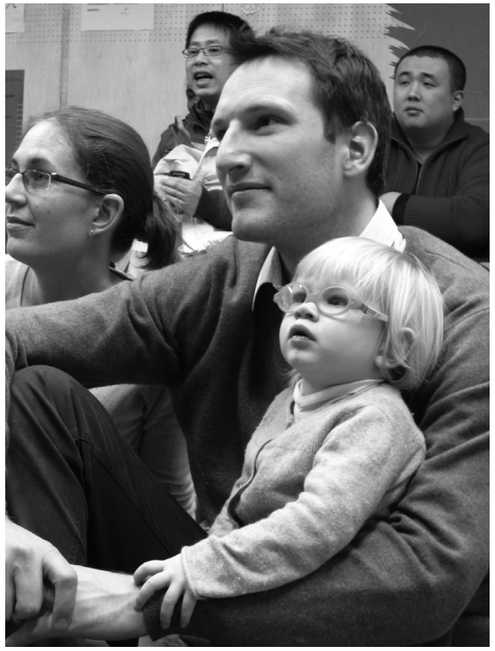
さらに作品内容の大切さを訴えました。

「紙芝居なら何でも良いのではないです。街頭紙芝居は、駄菓子を売るための人集めの道具だったため、中身は空虚なものでした。日本の侵略戦争の時は、共感をつくる特性を悪用され、数多くの紙芝居が戦争協力のためにつくられました。日本が多くの人の命を奪ったこの中国でも、そんな『にせもの』の紙芝居が演じられ、心までも奪おうとしたのです。」

二度と侵略戦争を起こしてはならぬ、私たちは、子どもたちの未来と平和を輝かせるものとして、紙芝居文化を根付かせていきたい。だからこそ、作家が作品の奥底に「生きる意味とすばらしさ」をこめた優れた作品をと、『あひるのおうさま』などを紹介しました。

講座の後、ぎっしりとメモしたノートを手に質問する人、紙芝居も舞台も自分の学校に買う人、「涙が何度もでた。」という人、そして、カリンさんは言いました。「多くの司書たちにとって、まさに別世界への扉が開かれたのです！」と。

そして上海で、平和紙芝居『二度と』を十一歳の子どもたち百人に演じた時間を、私は心に刻み続けます。生まれた国の違う子どもたちが、紙芝居のつくりだす共感の中で、「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ」を心深く響かせ、まっすぐに平和を見つめていたことを。紙芝居は、なんとすばらしい力を持っているのでしょう。



松井エイコ（壁画家・紙芝居作家、紙芝居文化の会国内企画推進委員）